ピューリッツァー文学賞受賞作

大農場 上

A THOUSAND ACRES

ジェーン・スマイリー

橘雅子 訳

映画化原作

「シークレット —嵐の夜に—」

本年9月松竹・東急洋画系ロードショー

中公文庫

A THOUSAND ACRES
by Jane Smiley
© 1991 by Jane Smiley
Japanese translation rights arranged with
Jane Smiley c/o The Aaron M. Priest Literary Agency Inc.,
through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo
Japanese paperback edition © 1998 Chuokoron-Sha, Inc.

中公文庫

大農場（上）

定価はカバーに表示してあります。

1998年8月3日印刷
1998年8月18日発行

著者　ジェーン・スマイリー

訳者　橘　雅子

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)　振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Masako Tachibana

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-203212-1　C1197　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

大　農　場

上　巻

ジェーン・スマイリー

中央公論社

目次

Book One 7
Book Two 81
Book Three 255

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

大農場

上巻

スティーヴに捧げる

体は風景を反復する。この二つはおたがいの源であり、おたがいがおたがいを生み出す関係にある。地球という体でめぐる季節、おびただしい人々の移動、この緑化する惑星において未曾有の変化である、この世紀の急激な転換のあとが、われわれの上に残された。

メリデル・ル・シュウール
「古い民族と新たに来た人々」

Book One

1

アイオワ州ゼブロン郡の郡道六八六号線沿いに広がる大きな農場、その郡道を時速六十マイルの猛スピードで走らせても、通り過ぎるのに一分はかかる大きな農場、それがわたしたちの生まれ育った農場だった。六八六号線を真北に走ると、T字路に行き当たった。ぶつかっているのはキャボット・ストリート・ロードで、このあたりで二本しかないアスファルト舗装道路のうちの一本というだけの、なんの変哲もない道路だが、このT字路から西に五マイル走るとキャボットの町があった。道路は町を貫通して、西のはずれでゼブロン郡シーニック・ハイウェイにつながり、三マイルほどゼブロン川の湾曲に沿って走って、川が南に流れを変えたところで別れて、そのままっすぐ西に延び、パイクの町に達していた。T字路のあたりは周囲よりいくぶん高くなっていたが、安物の皿のまんなかにある小さなこぶみたいにあるかないかの隆起だった。

そのこぶに立って四方を見渡すと、大地は疑いようもなく真っ平らで、空は確かに半球

形をしていた。子供のころのわたしは、学校でコロンブスのアメリカ大陸発見のことを教わったとき、地球は丸いという先生の言葉が信じられず、地球儀や地図を見ても、ゼブロン郡は宇宙の中心だという考えを変えることはできなかった。ずっと昔にこの大陸に住んでいた人たちも、わたしと同じ感じ方をしていたかもしれないと思ったものだ。平らな地面に球形のものが転がってきて完全に静止し、そこで根を下ろして、地表をおおう十フィートの厚さの表土にしっかりと根を張っていくにちがいない。わたしにとってゼブロン郡はそういう場所だった。

T字路からは、わたしたちの農場がよく見えた。南に一マイルほどのところに、農場の南端である住居と納屋があり、東に一マイルほどのところに、農場の北東の端を示す三つのサイロがあった。視線をサイロから住居と納屋に転じ、そしてまたサイロに戻すと、父が所有する六百四十エーカーの農場の広大さがまざまざと見てとれた。農場は借金もなく抵当にも入っていなかった。どこまでも平らで、肥沃で、黒々としていて、開墾しやすく、障害物がない。こんなすばらしい土地は地球上のどこを捜しても見当たらないと、当時、わたしは思っていた。

T字路から視線を西に転じると、みごとなほど索漠とした風景が広がっていた。ゼブロン川が表土と石灰岩を切り裂いて谷を作り、まわりの農地よりも低いところを流れている

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ために、美しい流れが見えなくなっているからだ。キャボットの町も明かりがともるころにならなければ、どこにあるかすらわからない。昼間はただ、畑にかこまれたよその農場が二つ見えるだけだ。手前のほうはエリクソン農場で、妹のローズと同い歳のダイナと、わたしと同い歳のルーシーという二人の娘がいた。遠いほうはクラーク農場で、ジェスとローレンという二人の息子がおり、このころ、わたしとローズは中学生だったが、クラーク家の息子たちはまだ小学校の上級だった。父親のハロルドは父の親友で、五百エーカーの農場主だった。父と同じで、農場は抵当に入っていなかった。一方、エリクソン農場は、三百七十エーカーと狭く、そのうえ抵当に入っていた。

ゼブロン郡では、所有する農場のエーカー数や借金の有無は、身分証明書の名前や性別のようなものだった。ハロルドと父は、わが家の台所のテーブルで、エリクソン家の抵当に入った土地のことをよく話題にし、抵当が流れるとき、その土地はおれのものになると、おたがいに譲らなかった。わたしもそのことがいつも頭にあった。ルーシーと遊んでいたときや母とローズとわたしが、エリクソン家に庭の作物を瓶詰めする手伝いに行ったとき、エリクソン夫人がお手製のパイやドーナツを持ってきてくれたときや父がエリクソン家に農具を貸していたとき、エリクソン家の台所で日曜日のディナーをごちそうになったときなど、事あるごとに思い出すほどだった。エリクソン家の土地は道路のこちら側にあるか

ら、こっちのものだというハロルドの言い分は正しいと思う一方で、うちのものになってほしいという思いも強かった。ダイナの寝室から続く納戸には窓際に腰掛けがあり、そこから外を眺めるのが大好きだったから、そこをなんとか自分のものにしたいという気持ちもあるにはあったが、エリクソン家の土地を手に入れると、クック家は六八六号線のT字路から広がる円状の平らな土地を所有することになる、そうなればこんないいことはない、合計すると、千エーカーを超える、ただそれだけのことだった。

農場のこと、その将来のことを、こんなふうにあれこれ考えだしたのは、わたしが八歳のときだった。一九五一年のことで、その年は父がビューイック・セダンをはじめて買ったときでもあった。シートはグレーで、毛足の長いごわごわした厚手のベルベット地だった。シートの角が丸くなっていたので滑りやすく、車がでこぼこ道を走ったり、急カーブを切ったりすると、後部座席でよく下に滑り落ちた。その年は末の妹のキャロラインが生まれた年でもあった。父が車を買ったのも、キャロラインが生まれるからという理由だったのは確かだ。エリクソン家とクラーク家の子供たちはまだ乗用車に乗ったことがなく、農家ならどこの家にもある小型トラックの荷台に乗せられていたころ、クック家の子供たちは土埃をかぶる心配もなく窓越しに通り過ぎる風景を眺めたり、乗用車の後部座席で、

はしゃいで前のシートの背を足先でつついたりしていた。乗用車は三百エーカーや五百エーカーの農場主と、六百四十エーカーの農場主の違いを見せつける象徴だった。

その年はガソリンが高いにもかかわらず、よく遠出をした。当時の農家では、乗用車での遠出など考えるだにできないことだった。キャロラインが生まれてからは、なぜか父は遠出をしなくなった。わたしにとって、遠出はコインをこっそりためこむのに似た楽しみだった。古色蒼然としたベルベット地の豪華な内装の車内で、すぐ下の妹のローズがわたしに寄りかかって座り（わたしはローズが大好きだった）、車輪が砂利を踏むきしり音が耳に入ってくる。わだちのついた道路を車が進むとき、車体は泳ぐように揺れる。そんなとき、妙にはしゃぎたい気分になった。一分ごとに大きな農家の前を通り過ぎ、あっというまに、それが豆粒のように小さくなっていく。そのときの爽快感はなんとも言えなかった。レジャーを楽しむという贅沢な気分、それにもまして大きな楽しみは、父や母が、目にしたことを穏やかな口調であれこれ言うのを聞くことだった。父はよその家の農作業の進展状況や、牧場で草をはむ家畜のようすを話し、母はよその家の建物や庭の外見や大きさ、外壁の色のことを話した。うちの仕事のほうがずっと進んでいる、うちの建物のほうがずっとりっぱで、手入れが行き届いていると話す両親の声は、ゆったりとして自信に満ちていて、自分たちの生活にすっかり満足しているようすがうかがわれた。今思うと、そ

のころの両親は、いかに限られた狭い世界しか見ていなかったか、視野の狭さは、子供のころのわたしとたいして変わらないとわかるが、当時八歳だったわたしは、両親の会話に耳を傾けていると、揺らぐことのない懐に抱かれている安心感を覚え、よそと比較してうちはりっぱだという話を何度も聞いているうちに、自然に、わたしたちの農場と生活はいつまでも安泰だという確信さえ抱くようになった。

2

クラーク家の長男ジェスは、十三年間、行方知れずだった。よくある事情、つまり、徴兵のために家を後にしたのだが、父親のハロルドがゼブロン・センターのバス停まで送った日から数カ月とたたないうちに、ジェスとジェスにまつわること一切が、口にすべきでないことの範疇に入れられてしまい、以来、彼のことが人の口の端に上ることは一度もなかった。ところが、一九七九年の春、わたしはバイクの銀行でばったり出会ったクラーク家の次男のローレンから、久し振りにジェスという名前を聞いた。ローレンは、ジェスの帰郷を祝って、うちで野外パーティを催すつもりだからみんなで来ないか、何も持ってくる必要はないからとだけ言い、それ以上のことは何も言わずに立ち去ろうとした。わたしは彼の腕を押さえて引き留めた。ローレンはおやっという顔をして、わたしをまじまじと見た。

「ねえ、結局、彼はどこにいたの?」とわたしはきいた。

「そのうちわかるさ」
「音信不通だと思ってたわ」
「そうさ、土曜の夜まではね」
「言うことはそれだけ？」
「それだけさ」ローレンはそう言うと、しばらくわたしを見つめていたが、おもむろに笑みを浮かべた。「いや、実を言うと、兄貴は待っていたっていう気がしないでもないね。おれたちが、兄貴の〝復活祭〟をはなばなしく催してやろうと、がむしゃらにがんばって一刻も早く植え付けを終えるのをさ」
がむしゃらにがんばったのはほんとうだった。この春は、いつまでも寒くてじとじとしていたから、畑に入ることができなかった。ところが、五月の半ばになると、どこの農家も一斉に畑に入り、郡内のトウモロコシ畑のほとんどは、二週間もしないうちに植え付けを終えたのだった。ローレンはまた笑みを浮かべた。彼の口ぶりから、驚くほどの短期間で植え付けを終えたことで、ちょっとした英雄気分になってるのはわかった。もっとも、このあたりの男たちはだれもがそうだった。わたしはふと気になって「彼はおかあさんのことを知ってるの？」ときいた。
「おやじが話したさ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor